

C型慢性肝炎のインターフェロン療法における口腔症状の検討

永井, 清志

<https://hdl.handle.net/2324/1500618>

出版情報：九州大学, 2014, 博士（歯学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

論文内容の要旨

C型慢性肝炎の治療は、従来のPeg-IFN（ペグインターフェロン）とRBV（リバビリン）の2剤併用療法に新薬であるTPV（テラプレビル）を加えた3剤併用IFN療法（IFN療法）が行われ、12週までは3剤を併用し、13～24週はPeg-IFNとRBVの2剤だけを併用する。本研究は、IFN療法の副作用としての口腔症状の解明を目的として、1）IFN療法における口腔症状、2）3剤投与期間中の口腔症状とその影響要因、について検討を行った。本研究の意義は、今後のIFN療法における副作用の軽減ならびに治療継続率の向上に寄与することにある。

【IFN療法における口腔症状】2012年1月～6月にIFN療法を行った50例を対象に味覚障害と口渇感（問診）、口腔粘膜疾患およびヘモグロビンについて治療期間である24週間と治療終了後の24週間について経時的变化を調査した。味覚障害は78.0%、口渇感は80.5%にみられ、TPV投与が終了する12週前後をピークとし、治療終了後に消失し可逆的であった。口腔粘膜疾患は、全例が口内炎で23例33病変がみられ、アフタ性口内炎15例、口角炎10例、口腔カンジダ症7例、口腔扁平苔癬1例であった。口腔扁平苔癬は治療終了後約1年半の時点で消失し、他の口内炎は治療終了後4週の診察時には消失した。ヘモグロビンは、初診時は $13.80 \pm 1.65 \text{g/dl}$ であったが、12週目には $9.69 \pm 1.60 \text{g/dl}$ と著明に低下し、TPV投与の終了とともに徐々に上昇し、治療終了後には初診時の状態に回復した。味覚障害、口渇感、口内炎ならびにヘモグロビンは、IFN療法終了後には改善したため症状は可逆的であることが明らかとなった。

【3剤投与期間中の口腔症状とその影響要因】2013年2月～7月にIFN療法を行った11例を対象に、TPVの投与期間である12週間の味覚障害と口渇感、全身症状のうち倦怠感、食欲不振、皮疹の自覚症状および苦痛度をVAS法により評価した。また、味覚障害の影響要因を唾液量（吐唾法、サクソンテスト、ガムテスト）、ヘモグロビン、血清亜鉛、血清鉄、口腔粘膜疾患の診査により行った。12週の調査では味覚障害10例、口渇感10例、口内炎3例、倦怠感9例、食欲不振8例、皮疹10例がみられ、味覚障害と皮疹は患者の苦痛度が高かった。安静時唾液量（吐唾法）、ヘモグロビンおよび血清亜鉛は、治療開始12週では初診時と比較し有意に低下していた。血清鉄の減少はみられなかった。口腔粘膜疾患は、アフタ性口内炎2例、口角炎1例がみられた。なお、刺激時唾液量は低下しなかった。以上より、TPVの投与により薬物性口腔乾燥症が惹起され、ヘモグロビンの著明な減少により血清亜鉛が低下することが味覚障害の原因となっていると考えられた。

IFN療法中の味覚障害は、皮疹とともに苦痛度が高くて改善が望まれ、亜鉛の投与などの検討が必要と考えられた。口渇感は、咀嚼などによる唾液排出の刺激や水分のこまめな摂取や夜間のマスクの使用、保湿剤の使用などの対症療法が必要である。口腔症状は、倦怠感、食欲不振、皮疹、貧血など様々な全身症状と関連していることから、内科や皮膚科など関連する各科と協力して治療を行い、患者のQOLの改善を図ることが重要である。